二〇一三年一二月六日

露天風呂冠雪の富士まなかひに　はく子
電飾の贅を競ひて街師走　満天
彩褪せて山は眠りに入らんとす　三刀
これよりは神域の山猪の罠　うつぎ

二〇一三年一二月五日

行厨の足を投げ出す散紅葉　よう子
道の駅葉つき大根山と積む　宏虎
玉の日に葉牡丹の渦緩むかと　菜々
律院の庭にひともと冬もみぢ　雅流
紅葉渓大吊り橋の揺れにゆれ　ともえ

二〇一三年一二月四日

せせらぎのか細き楽や山眠る　はく子
紅葉影磨崖弥勒のかんばせに　よし子
手をつなぎ子らスキップす園小春　よう子
築山を統ぶひともとの冬紅葉　菜々
讃美歌を口ずさみゆく小春坂　せいじ
宿下駄を鳴らして雪の露天湯へ　こすもす

二〇一三年一二月三日

年用意さて置き今日も吟行す　はく子
人力車庭に待機す紅葉宿　うつぎ

二〇一三年一二月二日

日向ぼこ仏足石をはばからず　なつき
メモ書きの多し暦の十二月　満天
参磴に立ち往生す枯蟷螂　つくし
灯台の見ゆるなぞへに蜜柑狩　あさこ
玉の日に庭の山茶花散りこぼれ　有香

二〇一三年一二月一日

黄落の無尽蔵なるご神木　うつぎ
夕照にシルエットなる冬木立　よし子
寒禽の鋭声こだます神の森　宏虎

二〇一三年一一月三〇日

神還るやに広前へ玉の日矢　菜々
大玻璃を額縁に燃ゆ庭紅葉　満天
抜ける程青き空より黄落す　さつき
大根の青首畝をせりあがる　宏虎
径に敷く紅葉友禅模様とも　はく子

毎日句会みのる選・二〇一三年一二月八日